

エジプトの19世紀人口推計

店田 廣文

I. 19世紀の人口調査

近代的な人口センサス（人口の全数調査）が初めて実施された19世紀より以前のエジプトの人口については、古代エジプトからの人口の規模がある程度推計されている。それら研究の一部を参照すると、エジプトの人口は11世紀や17世紀頃に、最大で約500万である（McEvedy & Jones 1978 : 226）¹。19世紀初めの人口はナポレオンのエジプト遠征に同行したフランス人科学者の推計によると、約250万前後の数字が掲げられている（Jomard 1818 (2006) : 100）。

エジプトでは、その後19世紀前半に租税台帳と家屋台帳を利用した人口調査（いずれも人口の全数調査ではない）が行われ、さらに1882年には第1回の近代的人口センサスが試みられ全人口が報告されている。しかし、1897年、1907年と連続して実施された第2回と第3回の近代的人口センサスの結果を利用した遡及的な考察によって、1882年を含めそれ以前の人口調査や推計は信頼度の点で問題があることが指摘されてきた。19世紀のエジプト社会については多彩な主題について数多の研究が刊行されているが、社会のベースとなる人口については一定の共通項が必ずしも存在していないのが現状である。後述するように、幾つかの19世紀人口に関する研究があるが、それらの推計人口には年によりかなりのバラツキが見られる。エジプトの「近代化」が始まったとされる19世紀初期から19世紀末までの人口のより正確な情報を把握することは、19世紀エジプトの政治・経済・社会の実態を明らかにするうえで重要であろう。本稿では、先行研究のそれぞれの手法を再検討して、問題点を洗い出し、推計された人口を比較対照したうえで、エジプトの19世紀人口に関する基礎的な情報を改めて整理して提示することを目的とする。

II. 19世紀人口推計の概況

19世紀人口に関する公式統計による数値に関して、その信頼性についてたびたび疑義が唱

第1表 エジプトの19世紀人口調査報告等による全人口（単位：人）

西暦	全人口
1800	2,460,200
1821	2,536,400
1846	4,476,440
1882	6,705,825
1897	9,634,752

出典：Departement de la Statistique et du Recensement, Republique d' Egypte 1956

えられてきた。1956年発行の『統計年鑑』には、第1回の近代的人口調査（人口センサス）である1882年人口センサスおよびそれ以前の19世紀の人口調査と推計による人口が掲載されている（第1表）²。3それによると、1800年の人口は、ナポレオンのエジプト遠征に同行した研究者による推計値が掲載され、1821年の人口は租税台帳による集計値、1846年の人口は家屋台帳による集計値³、1882年の人口は、最初の近代的人口センサスによる集計値が、それぞれ掲載されている。19世紀末の1897年には第2

回目の近代的人口センサスが実施され、この集計値は信頼性が高いものとされているが、1882年の人口センサス以前の人口は、多くの研究者が改めて推計する必要があると主張し、後述する数人の研究者が独自の手法で、1800年以降の推計人口を発表している。

これまで刊行されてきた19世紀人口に関する主な推計としては、マッカーシー（McCarthy 1976）、パンザック（Panzac 1977；Panzac 1987）、ベア（Bare 1969）、クレランド（Cleland 1936）がある⁴。それらの推計値の一部を比較してみると、1800年、1846年、1882年の人口推計値には、最小で20万人～最大で100万人ほどの開きがある。例えば、1800年では、384万人（マッカーシー）と450万人（パンザック）、1846（1848）年では、448万人（マッカーシー）と540万人（パンザック）とかなり大きな差異がある。また最初の近代的人口センサスとされているものの信頼性に問題があるとされる1882年センサスの人口に関する推計値についても、780万人（マッカーシー）と800万人（パンザック）と差異がある。各々の研究者は独自の考え方と方法で推計を行っており、それぞれが論理的に推計値を提出しているように考えられる。しかし、上記4人の推計を検討してみると、首肯できる部分と疑問に思われる部分があり、それらを考慮して改めて人口推計を行うことがエジプトの19世紀社会研究にとっては必要であろうと考えた次第である。ただし、これらの先行研究は利用しうる資料をほぼ網羅的に使用しているので、本稿では、これら先行研究の推計方法や人口を確認しながら、納得できない部分を排除し、人口増加率の値を再考した。したがって、新たに独自の推計を行ったと言うより、改めて、先行研究の推計人口を一貫性のあるものとして整理し直したものである。将来的には、フランスの研究機関CEDEJが1990年代後半から取り組んでいる1846年の個票データの解析がすすめば、新たな資料に基づいた人口推計が可能になることも考えられる（Alleaume & Fargues 1998）。

III. 主要な先行研究の検討

「19世紀エジプト人口」を著したマッカーシーは、はじめにナポレオンのエジプト遠征に同行したフランス人学者によって推計された1800年人口を再検討している（McCarthy 1976：1-6）。

彼は首都カイロの人口について、1戸あたりの人数を8人として計算し直した上で、全人口に占めるカイロ人口の構成比率を1846年当時と同様と判断して、1800年人口を384万と推計した。彼は、1846年に行われた家屋台帳による人口集計値（448万人）については近代的人口センサスほど正確というわけではないが、1840年代の人口に関するその他の情報に比べれば信頼に足る数字であるとして、そのまま採用している（McCarthy 1976：18-19）。彼の場合、19世紀人口の推計にあたり、コレラやペストなど疫病による死亡数を外交文書などによって確認するなどして、死亡数を組み込んだ各年人口の推計値を算出している（McCarthy 1976：6-15）。まず1800年から1846年間の各年人口の推計値については、年平均増加率をコンスタントなものとして算出し、その過程で1821年人口を推計している。改めて筆者が計算してみると、彼はこの46年間の年平均増加率を0.64%としている。

次いで、1882年人口については、1897年センサスの人口数からみて、異常に低い値であるとする。この数値をそのまま採用すれば、1882年から1897年まで年平均増加率2.4%という異常に高い増加率となり、次の10年間の年平均増加率1.5%と大きく異なる。因みに、2.4%という値は、1960年代のエジプト人口の年平均増加率に匹敵するものであり、当時の保健衛生状態や出生・死亡の状況から見ても現実的でない数値であろう。そこで、彼は1897年センサスと1907年センサスを参照して、この2つのセンサス間の年平均増加率1.5%を1882年から1897年にも適用することとして、その間の各年人口の推計値を算出したのである（McCarthy 1976：24-26）。マッカーシーの場合は、基準年の人口推計値は、以下の通りである。3,835,633人（1800年）、4,423,396人（1821年）、4,476,439人（1846年）、そして、7,840,271人（1882年）である。

「19世紀におけるエジプト人口」を著したパンザックは、はじめに次のように指摘している。ナポレオンのエジプト遠征当時の人口推計値を採用するとすれば、1897年人口までのほぼ1世紀の間に、エジプト人口は4倍増にもなっており、1800年の推計人口は再検討が必要であると述べている。彼は、1882年人口の再検討から出発し、マッカーシー等と同様に1897年センサスと1907年センサスを参照して、両センサス間の年平均増加率を1882年から1897年にも適用することとして、推計値を算出したのである（Panzac 1987：11-12）。ただし、筆者の計算によれば両センサス間の年平均増加率は1.5%であるにも関わらず、パンザックは、年平均増加率を1.3%としており、なぜこの値としたのかは不明である。このような手順を踏んで、彼は1882年人口を800万人と推計した（Panzac 1987：15）。そして遡及して1848年人口を推計するにあたり、その間のエジプト社会の時代背景として、疫病ワクチン・キャンペーンの開始やアメリカ南北戦争当時の棉花市場の好況などを勘案したうえで、1848年から1882年までの期間を安定した人口増加が見られた時期としている。そこで、同期間については、1882年以降よりも1ポイント低い1.2%の年平均増加率を採用して、1848年人口を540万人と推計した（Panzac 1987：12）。この人口がムハンマド・アリーの家屋台帳による人口集計値と比べおよそ20%多いことについて、彼は、兵役逃れや徴税忌避による台帳登録の漏れではないかと考えている（Panzac 1987：13）。次いで、外交文書に残されているムハンマド・アリーの「1827年には、618千世帯の税金支払い世帯」という情報を元にしようとして、1882年センサスと1897年センサスの地方における世帯あたり人数を検証すると平均7人でほとんど変化がないことから、1827年にも7

第2表 先行研究にみるエジプトの19世紀人口推計比較（単位：千人）

西 暦	マッカーシー	パンザック	ベア	クレランド
1800	3,836	4,500		2,460
1805				
1821	4,423		4,230	2,536
1830		5,000		
1840		5,000		
1846	4,476		5,290	4,476
1848		5,400		
1882	7,840	8,000	7,930	7,440
1897	9,734	9,734	9,717	9,634

出典：McCarthy 1976；Panzac 1977, 1987；Baer 1969；Cleland 1936

人を適用するとして1830年人口を推計している。ここでも、1848年人口と同様な登録漏れがあることを勘案した推計である（Panzac 1987：14-15）。

パンザックは、19世紀前半の人口増加に関して、1800～1830年については年平均増加率に換算すると0.3～0.4%程度の増加、1830～1840年については横ばいで増加はない時期、1840～1860年については着実な増加の時期と指摘し、1840～1848年の年平均増加率は1848年以降よりも2ポイント低い1.0%としている。彼の場合、基準年の取り方が10年単位であったり、推計人口についてはおよそ100万人単位として表示しており、基準年の人口推計値は、以下の通りで、450万人（1800年）、500万人（1830年）、500万人（1840年）、540万人（1848年）、そして、800万人（1882年）である。

ベアの研究は、あくまでも都市化研究の一環として人口推計を行ったため、マッカーシーやパンザックとは異なり、詳細な人口推計を実施しているわけではない。彼の推計の概要は、以下の通りである。ベアは、1907年センサスの序文において既に1882年センサスの信頼性についての言及があることに触れた上で、同書に記載された1821年から1907年までの人口集計と人口調査の数字をそのまま受け入れた場合、年増加率が異常に高くなると指摘する（Baer 1969：133-135）。たとえば、1821～1846年では年率3.0%、1882年から1897年では年率2.8%となり、非現実的な増加率であると断言する。そして、よりリアリスティックな年増加率として、1821～1846年、1%、1846～1882年、1.4%、1882～1897年、1.5%、という増加率を適用する（Baer 1969：135-136）。ただし、これらの数字の根拠については詳述していないが、1897～1907年の増加率を参照して算出したものと考えられる。ベアの推計結果は、423万人（1821年）、529万人（1846年）、793万人（1882年）であり、1897年については人口センサスの結果を引用している。

1936年に『エジプトの人口問題』を著したクレランド（Cleland 1936）は、1882年の人口は確定数字ではないものが報告されているとして、まず、1897年、1907年、1917年、1927年の4つのセンサス間の増加率を検証する。それによれば、1897～1907年の年増加率は1.52%、

1907～1917年は1.33%、1917～1927年は1.07%であり、増加率は通減している。そこで、彼は10年間の年率の平均通減率を0.23%と計算する。その上で、1897～1907年の年増加率1.52%に0.23%をプラスして、1882～1897年の年増加率を1.75%と推計して、1882年の推計人口744万を算出している（Cleland 1936：6-9）。ただし、増加率をプラスして修正していることに関して、具体的な説明はない。

以上、4人の先行研究を検討してきたが、彼らが推計した人口は第2表に示したとおりであり、以下ではマッカーシーとパンザックの研究を主に取り上げながら、人口と増加率および19世紀社会の変動を重ね合わせながら次に考察していこう。

IV. 19世紀の社会変動と人口

ここでは、19世紀エジプト社会の変動をにらみながら先行研究による19世紀人口推計を再考する。18世紀末頃のエジプト社会では、経済的な停滞が報告されてはいるものの、政治改革の動きがあり、論者によっては「長い19世紀」として1770年代頃から1900年代はじめ頃までを一連の時代として分析することが行われている（Toledano 1998：252-284）。しかし本稿では人口情報の有無を考慮して、エジプトにとって所謂「西洋の衝撃」となったナポレオンのエジプト遠征を起点と設定し、次のような時期区分を行って、19世紀エジプトの社会変動と人口との関係を確認していくこととする。時期区分のポイントとなる時点は、1821年、1846年、1882年とし、各々何らかの形で、人口に関する調査が実施された年としたが、各年はそれぞれエジプト社会の大きな変動の時期とも大まかには対応していると言ってもよいだろう。そして、第1期は、1798～1821年、第2期、1821～1846年、第3期、1846～1882年、第4期、1882～1907年までの4区分として、エジプト社会の概況を述べていく。それぞれの時期の長さは、順に約20年、約25年、約35年、約25年ということになる。

第1期（1798～1821年）は、ナポレオンのエジプト遠征に始まる。フランスによるエジプト占領は、イギリス軍・オスマントルコ軍の連合軍により、わずか3年と短期間で終了したが、エジプト社会に与えた影響は大きかった。戦乱による国内の混乱や経済危機の深化がすすみ、ペスト禍も追い打ちをかけたが、エジプトが新たな時代へと変革をはじめた時期であった。社会の混乱もムハンマド・アリーがエジプト総督に任命されたことを契機として徐々に解消されていく。1811年のマムルーク虐殺を経て支配体制を固め、農業生産の増強や租税徴収の強化を図り、財政体制の確立へと向かっていくのである。具体的には、1813年からの農地調査や通年灌漑を目的とする運河掘削事業の開始などがある。したがって政治・経済的には大きな変革が始まった時代ではあったが、この時期には住民を対象とする広義の福祉政策は省みられず、生活水準の上昇も実現しておらず、人口と社会という視点から見れば、18世紀末頃の状況が継続していた時代である。したがって、増加は緩慢であり、人口はこの20年ばかりの間は大きく変化していないものと考えられる。

第2期（1821～1846年）の1821年には租税台帳による人口調査が行われており、それによると全人口は253万6千4百と報告されている。1800年当時の人口は246万2百と推計されており、ここまでの約20年間に人口に大きな変動はなく、公式統計に報告されている数字でも第1期の人口増加が緩慢であったことが確認される。農村社会の管理をはじめ、中央集権的な支配体制を確立しつつあったムハンマド・アリーは、国外での軍事行動にも積極的であった。すでに前期からオスマントルコの意を受けたサウジアラビア遠征、自国の利益拡大を目指したスーダン遠征をはじめ、第2期になるとギリシア遠征、シリア遠征なども行われた。このような軍事行動には1821年からはじまった徴兵制による近代的軍隊の創設が大きな役割を果たした。基盤となる人材育成としての教育制度の整備や、兵器工場や砂糖工場、精米工場などの産業基盤の形成も行われた。これら軍隊や産業を支えるための医療改革にも力が注がれ、軍病院のみならず一般市民のための病院開設や天然痘ワクチンの接種なども始まった。しかし住民にとっては徴兵制をはじめ、工場労働への徴発、強制労働による運河掘削への徴発など、苦しい時代であったことは間違いない（山口2006：71-75）。

第1期に比べれば、医療衛生状態の改善が人口増加に寄与するところであるが、数次の軍事遠征による被害や疫病による大量の人口喪失などもあり、第2期全体としては若干の増加にとどまったものとみられる。したがって、前述したようにパンザックによる推計では、1830年代の人口増加は年率0.3%前後、1830～1840年頃まではゼロ成長と推計されている。その後の1840年代については、年率1%とされている。1840年代は、英仏とオスマントルコおよびエジプトの関係が、1841年勅令によって、いわば精算された時期にあたり、拡大主義を取ってきたエジプトが、エジプト本土とスーダンにその勢力範囲を限定され、「大エジプト」構想が潰えた時期であった（中岡1991：87）。しかし、エジプト社会にとっては戦争が終わり平和な時代であり、住民にとっても穏やかな時代となった。1846年の家屋台帳に基づく全人口は、447万6千4百と報告されている。マッカーシーは、この数字を採用しているが、パンザックは上述したような緩やかな増加と約20%の登録漏れを考慮して、540万人（1848年）としている。

第3期（1846～1882年）について、論者によっては1870年代を「新しい時代の幕開け」としたり、1850年代から1880年代を「発展の時代」として注目しており、エジプト社会の開発が進行した時代であった（Toledano 1998：252-253）。この中には、カイロ・アレクサンドリア間の鉄道開通（1858年）、デルタ・バラージュ（堰）の完成（1861年）、カイロ・ガスおよび水道会社の設立（1865年）、郵便事業開始（1867年）、スエズ運河開通とオペラ・ハウス開館（1869年）、ダール・ウルーム（高等師範学校）の開設（1871年）など、社会インフラの整備が進み、カイロでは新市街の建設が行われた。ヨーロッパとは自由貿易の時代であり、貿易や資本の自由化を受け入れて、外国からの投資も拡大し、エジプトは開発ブームに沸いた時期であった。また行政機構が確立され、出生・死亡登録が整備されたのもこの時期である。1882年に近代的人口センサスが実施され、全人口は6,705,825と報告されたが、この数字は前述したように過小である。マッカーシーもパンザックも、1897年と1907年の人口センサスの分析から遡及的に1882年の推計人口を算出している。方法は同じであるが、マッカーシーは784万人、パンザックは800万人と若干異なった推計人口となっている。いずれにしても第3期は人口増加率も後の時代に

匹敵するものとなったのである。

第4期（1882～1907年）は、前期終盤のオラービー革命の変動後、イギリスによるエジプト占領となり、ムハンマド・アリー王朝は継続したものの、イギリス支配によるエジプトの社会的安定の確保と政治経済運営が行われた。1883年にエジプト総領事に就任したクローマー卿のもと、破綻した国家財政の立て直しが実施され、債務の減少、政府財政の回復と農業を中心とした生産の増加が実現した。住民の生活水準も上昇し、強制労働制度は廃止（1886年）された。1897年に実施された人口調査は信頼性が向上したものであり、全人口は、9,634,752と報告されている。人口増加率は、さらに高くなり、マッカーシー、パンザックともに、人口センサスに準じた推計人口を提出している。なお、1907年までの10年間の人口増加率は、年平均増加率で約1.5%である。

V. 新たな19世紀人口推計

これまで19世紀の社会状況と人口に関して先行研究による推計人口を確認しながら辿ってきた。以下では、上記をふまえながら19世紀人口について再考する。本稿が採用した推計方法は、先行研究においても採用されている遡及的な推計（補外推計）である。ここでは、それ以前の人口調査より信頼性が高いとされる1907年と1897年の人口センサスによる人口及び人口増加率を第一の基準としながら、19世紀末から19世紀初頭、すなわち第4期から第1期にさかのぼる形で、推計人口を算出していく。

まず第4期について検討する。ここで問題となるのは、1882年人口である。1907年と1897年の人口については、人口センサスを採用した。そこで、この2つのセンサス間の年平均増加率を計算すると、1.51%である。1882年から1897年の時期は、オラービー革命後にイギリスによる占領が開始され、社会的には安定した時代となったことから、この期間についても同率の1.51%を適用することとして、1882年の人口を遡及的に推計し、7,768,000人を当時の全人口とした。ただし、この15年の期間には、1883年と1896年に疫病による死亡数が報告されていることから、この期中の各年人口はマッカーシーによる死亡数を勘案して行っている。因みに、筆者の計算によると、マッカーシーの場合、この期中の増加率は1.50%、パンザックは1.32%を適用している。

次に、第3期（1846～1882年）について検討する。この期間の人口増加率の情報を改めて得るために、第1表に掲載している従来の人口調査の数字をもとに（1846年=4,476,400人、1882年=6,705,825人）、人口増加率を計算すると年率1.13%となる。上述の第4期に比べると増加率は低いが、第3期は「開発ブーム」の時期であり、社会インフラ整備や、出生・死亡登録が開始されるなど保健衛生状況の改善が進んだ時期であり、この増加率そのものは決して過大でも過小でもないと考えられる。因みに、マッカーシーの本期中の増加率を疫病による死亡数を考慮して計算してみると、1.72%である。この値は、後年の1897～1907年の増加率よりも高く、

やや疑問が残る。一方、パンザックの増加率（1848～1882年）は、1.16%と上述した増加率とほぼ同等である。パンザックやクレランドも指摘するように、1846年と1882年には異なる理由ではあれ、人口集計の大きな漏れがあったものと考えられるが、増加率自体に問題は無いものとして、1.13%を採用することとした。ただし、この期中にもマッカーシーによると1850年、1855年、1865年と疫病による多数の死亡が報告されているので、それらを勘案した各年人口の推計を行った。

第2期（1821～1846年）は、人口増加の可能性が19世紀初めよりは高まった時期ではあったが、戦争や強制労働など阻害する要因も多く、増加率は若干の上昇にとどまったものと考えられる。マッカーシーは、第1期から第2期までコンスタントな増加率を想定しており、筆者の計算によると、年平均増加率は0.64%である。一方、パンザックは、一部は第1期にも重なるが、筆者の計算によれば、1800～1830年については0.35%、1830～1840年は横ばい（ゼロ成長）、1840～1848年は0.97%を適用している。本稿では、社会状況やこれら先行研究の結果を踏まえ、さらに後述の第1期の増加率をも勘案して、第2期には、第3期と第1期の増加率の中央値を適用するという方法をとることとした。つまり、第3期の1.13%と、後述の第1期の0.38%から、0.76%を算出し、これを適用した。

第1期（1800～1821年）は、公式統計によると246万から254万へと約20年間で8万人の増加にとどまった人口増加の緩慢な時代であった。この時期の増加率については、公式統計の人口をもとに増加率を計算してみると、0.15%となる。マッカーシーは、上述したようにこの第1期についても0.64%を適用しているが、パンザックは上述のとおり0.35%で

第3表 19世紀エジプトの人口推計

西暦	人口調査人口	推計人口	疫病による死亡数
1800	2,460,200	4,726,000	
1801		4,744,000	
1802		4,762,000	
1803		4,780,000	
1804		4,798,000	
1805		4,816,000	
1806		4,834,000	
1807		4,853,000	
1808		4,871,000	
1809		4,889,000	
1810		4,908,000	
1811		4,926,000	
1812		4,945,000	
1813		4,964,000	
1814		4,982,000	
1815		5,001,000	
1816		5,020,000	
1817		5,039,000	
1818		5,058,000	
1819		5,077,000	
1820		5,096,000	
1821	2,536,400	5,116,000	
1822		5,154,000	
1823		5,193,000	
1824		5,232,000	
1825		5,271,000	
1826		5,311,000	
1827		5,351,000	
1828		5,391,000	
1829		5,432,000	
1830		5,473,000	
1831		5,334,000	180,000
1832		5,374,000	
1833		5,415,000	
1834		5,456,000	
1835		4,997,000	500,000
1836		5,034,000	
1837		5,072,000	
1838		5,110,000	
1839		5,149,000	
1840		5,188,000	
1841		5,227,000	

1842		5,266,000	
1843		5,306,000	
1844		5,346,000	
1845		5,386,000	
1846	4,476,400	5,427,000	
1847		5,488,000	
1848		5,550,000	
1849		5,613,000	
1850		5,637,000	39,300
1851		5,700,000	
1852		5,765,000	
1853		5,830,000	
1854		5,895,000	
1855		5,846,000	116,020
1856		5,912,000	
1857		5,979,000	
1858		6,046,000	
1859		6,115,000	
1860		6,184,000	
1861		6,253,000	
1862		6,324,000	
1863		6,395,000	
1864		6,468,000	
1865		6,419,000	122,044
1866		6,491,000	
1867		6,564,000	
1868		6,638,000	
1869		6,713,000	
1870		6,789,000	
1871		6,866,000	
1872		6,943,000	
1873		7,022,000	
1874		7,101,000	
1875		7,181,000	
1876		7,262,000	
1877		7,344,000	
1878		7,427,000	
1879		7,511,000	
1880		7,596,000	
1881		7,682,000	
1882	6,705,825	7,768,000	
1883		7,827,000	58,511
1884		7,945,000	
1885		8,065,000	
1886		8,186,000	

1887		8,310,000	
1888		8,435,000	
1889		8,562,000	
1890		8,691,000	
1891		8,822,000	
1892		8,955,000	
1893		9,090,000	
1894		9,227,000	
1895		9,366,000	
1896		9,492,000	16,000
1897	9,634,752	9,634,752	
1898		9,780,000	
1899		9,927,000	
1900		10,077,000	
1901		10,229,000	
1902		10,383,000	
1903		10,540,000	
1904		10,699,000	
1905		10,860,000	
1906		11,024,000	
1907	11,189,978	11,189,978	

注：疫病による死亡数については、マッカーシー（McCarthy 1976）を参照し、可能な限り典拠となっている資料を確認して数値を掲載した。

出典：人口調査人口：『統計年鑑』1956年（詳細は、本文と文献リスト参照）
推計人口：筆者による推計（詳細は本文参照）

第4表 新たな推計人口と従来の推計人口の比較（単位：千人）

西暦	マッカーシー	パンザック	ベア	クレランド	店田
1800	3,836	4,500		2,460	4,726
1821	4,423		4,230	2,536	5,116
1846	4,476		5,290	4,476	5,427
1848		5,400			5,550
1882	7,840	8,000	7,930	7,440	7,768
1897	9,734	9,734	9,717	9,634	9,634

出典：McCarthy 1976；Panzac 1977, 1987；Baer 1969；Cleland 1936 筆者による推計値については、第3表を参照。

ある。これらを適用すると、マッカーシーでは同期中に385万から442万へと57万人もの増加となり、パンザックでは同期中に450万から484万（筆者による計算）へと34万人の増加となる。一方、クレランドは、内紛などによる人口への影響を指摘し、人口増加は僅かであったと見なし、0.15%を採用している（Cleland 1936：6）。そこで、本稿では、これら3つの増加率を平均した値0.38%を適用することとした。

以上、遡及して増加率を検討してきた結果、第4期から順に、1.51%、1.13%、0.76%、0.38%を、各期の年平均増加率とすることとして、疫病による死亡数を考慮して、推計された人口が、第3表の通りである。以上の推計人口については、最初にも述べたとおり、先行研究を検討し整理した上で、提出したものであり、それらと比較すると（第4表）、基準年の人口は1882年以外はいずれも若干大きくなり1800年人口は473万、1821年人口は512万、1846年人口は543万、1882年人口は777万となった。

本稿では、はじめに述べたように、新たな資料や方法を利用して、19世紀人口を推計したわけではない。先行研究の再検討によって、首肯できる部分は利用し、増加率や推計値が異なる場合は調整して、ある意味で統合した推計人口の提出を試みたものである。本稿が、改めて19世紀人口を再考する契機となり、より深化した分析が実施されることが今後の課題である。

〔注〕

1. その他にも、いくつかの研究があり、以下の文献には、それらの一部を検討した結果が述べられている。そこでは、紀元前や紀元後6～7世紀には、2000万以上の人口が居住していたものと推計している研究も取り上げられている。しかし、本稿では、それらの推計は過大であると見なして考慮していない（Hollingsworth 1969：307-311）。また最近の研究を見ると、500万から700万程度の人口が提示されている（Scheidel 2001：246-247）。
2. 手元で確認できる限りでは、1987年版以降の統計年鑑では、1882年以降の人口センサス報告が掲載されている（Central Agency for Public Mobilization and Statistics 1987）。
3. 1846年の人口調査については、実際には1846年から1848年にかけて実施されたようである（Cuno & Reimer 1997：199-200）。
4. その他の推計として、シャイデルがある（Scheidel 2001：201-212）。シャイデルは、マッカーシーとパンザックの推計を検討して、彼の推計人口を提出しており、本稿で筆者が試みた方法に近

いものである。シャイデルの推計人口は、480万（1805年）、535万（1840年）、825万（1882年）、1000万（1897年）などとなっている。

参考文献

- 中岡三益 1991 『アラブ近現代史』岩波書店。
 山口直彦 2006 『エジプト近現代史』明石書店。
 Alleaume, G. & Fargues, P. 1998 “La naissance d’une statistique d’État”, *Histoire & Mesure* 13-1 & 2 : 147-193.
 Baer, G. 1969 “The Beginnings of Urbanization”, in Baer, G. (ed.) *Studies in the Social History of Modern Egypt*, Chicago : 133-148.
 Central Agency for Public Mobilization and Statistics 1987 *Statistical Year Book 1952-1986*, Cairo.
 Cleland, W. 1936 *The Population Problem in Egypt: A Study of Population Trends and Conditions in Modern Egypt*, Lancaster.
 Crouchley, A. E. 1938 *The Economic Development of Modern Egypt*, London.
 Cuno, K.M. & Reimer, M.J. 1997 “The Census Registers of Nineteenth-Century Egypt : A New Source for Social Historians”, *British Journal of Middle Eastern Studies* 24-2 : 193-216.
 Département de la Statistique et du Recensement, République d’Égypte 1956 *Annuaire Statistique 1951-1952, 1952-1953 et 1953-1954*, Le Caire.
 Hollingsworth, T. H. 1969 *Historical Demography*, London.
 Jomard, E. 1818 (2006) “Mémoire sur la population comparée de l’Égypte ancienne et moderne”, *Description de l’Égypte*, vol. 1 (DVD version), Le Mans.
 Mboria, L. 1938 *La Population de l’Égypte*, Le Caire.
 McCarthy, J.A. 1976 “Nineteenth-Century Egyptian Population”, *The Middle Eastern Studies* 12-3 : 1-39.
 McEvedy, C. & Jones, R. 1978 *Atlas of World Population History*, London.
 Panzac, D. 1977 “La population de l’Égypte à l’époque contemporaine”, in *L’Égypte d’aujourd’hui 1805-1976*, Paris : 157-178.
 Panzac, D. 1987 “The Population of Egypt in the Nineteenth Century”, *Asian and African Studies* 21 : 11-32.
 Rabino, J. 1884 “Some Statistics of Egypt”, *Journal of Statistical Society of London* 47-3 : 415-467.
 Scheidel, W. 2001 *Death on the Nile: disease and demography of Roman Egypt*, Leiden.
 Toledano, E.R. 1998 “Social and economic change in the “long nineteenth century””, in Daly, M. W. (ed.), *The Cambridge History of Egypt, vol.2*, Cambridge : 252-284.
 Kraus, J. 2004 *Die Demographie des Alten Ägypten*, Göttingen. (URL <http://d-nb.info/972077227/34> 2011/11/16)

付記：本稿は、一橋大学グローバルCOEプログラム「社会科学の高度統計・実証分析拠点構築」のアジア長期経済統計プロジェクトによる研究成果の一部を利用して執筆したものである。なお、最終的な推計人口や詳しい推計の方法、その他の文献情報に関しては、同プロジェクトから出版予定の『アジア長期経済統計：トルコ・エジプト（仮題）』（東洋経済新報社）を参照されたい。

